入江長八と大分に残る鏝絵

第3回　安心院（あじむ）周辺の鏝絵

東京都立大学 プレミアム・カレッジ　本科・専攻科修了
一級建築士　**立川 公彦**

1．安心院とその周辺の鏝絵

■朝顔・雷（安心院）明治15年

↑ 図1　制作：長野鐵蔵（35歳）

戸袋に描かれた鏝絵は、周囲を額縁風に起こし、雲形や波形を丁寧な鏝裁きで表現しています。稲妻の下は幾何学的に朝顔が表現されています。朝顔の種子が下剤や利尿剤となるものであったことから、医者であった家主を意識したものと考えられています。額縁の内側の小さい枠は、青い漆喰が塗り込まれており、色は現在もはっきり残っています。しかし、その他の部分は着色で表面のみであったのか、または漆喰に練り込まれた顔料が少なかったのか、退色しています。ほぼ同じ構図の作品が他にも存在します。制作期は不明ですが、この作品と同じ長野鐵蔵の制作です。面白いことに画題名は朝顔ではなく「七宝つなぎ」としています。七宝柄も円満・調和・ご縁という意味で縁起が良いとされていることから、建物の装飾に取り入れられたのではないかと考えられます。

■虎（安心院）明治17年

岩場を降りてくる虎の構図は、この地域に他にもいくつかありますが、いずれも頭部を下にした構図で、虎特有の縞模様はなく色もすべての虎が同じ黄

↑ 図2　制作：長野鐵蔵（37歳）

土で塗られています。墨塗りの柄が退色してしまったとも考えられますが、本物の虎を容易に見ることのできる現代と違って、違和感はなかったのかもしれません。虎の口元を見ると少し笑っているように見え、怖さよりも親しみすら感じます。

■真壁の富士山（安心院）明治17年

↑ 図3　制作：長野鐵蔵（37歳）

真壁の富士山は、柱の存在を気にすることのない大胆な構図となっています。富士の形状は葛飾北斎の赤富士を想起させますが、頂上の形からすると、安心院から望める由布岳（豊後富士）のようにも見えます。家主の益々の発展を願ったものと思われます。

■外法の散髪（安心院）明治18年

↑ 図４　制作：山上重太郎（22歳）

画題を「外法（福禄寿）の散髪」とし、棚の上には整髪料の瓶も描いているなど、コミカルで独自性のある表現となっています。江戸末期から明治初期に土産物として売られた大津絵に、同じ画題があるようです。道路に向けてひと際目立つ位置に設置されています。

■恵比寿と雲（院内）明治期

↑ 図５　制作：佐藤本太郎

土蔵の妻壁に鯛を抱えた恵比寿が描かれています。手に持った竿は本物の竹を使っており、魚籠に入りきれないほどの大きな鯛で躍動感のある表現となっています。アーチ型の窓の周辺には西洋建築風に煉瓦を描き、洒落たデザインとなっています。欠損部の断面を見ると、壁の中塗と同様に土壁で浮彫の部分までつくり、表面の仕上げ部分のみ漆喰を塗っていることが確認できます。

2．大分の鏝絵について

↑ 図６　旧商家の鏝絵（安心院）

大部分の鏝絵は、建物のアプローチや道路側など目立つ場所に設置されています。白い漆喰壁に、青･茶･赤茶・黄色の彩色が鮮やかです。但し、草や木の葉は緑ではなく青色で表現されています。当時の練りこみ顔料では、緑色を作ることができなかったようです。また、少し離れたところからの目線を意識した大胆な構図となっており、敢えて必要以上の細かい技巧を駆使しているわけではありません。その技法がかえって素朴さや親しみやすさを醸し出しています。

大分では施主が鏝絵を工事として依頼しているわけではなかったようです。前号でご紹介した「猿三番叟」のある日出の馬屋には、工事内訳の板札が残されていましたが、鏝絵に関する項目はありませんでした。おそらく鏝絵は、工事の依頼を請けた左官職人が工事完成のお礼として制作したいわゆる「サービス工事」のようなものであったと考えられます。とはいえ、建物と一体となった鏝絵ですから、左官職人は施主に喜ばれるような画題を選び、耐久性にも配慮し、精魂込めて制作しています。鏝絵は、左官職人が自らの腕の良さの証しとして建物に残すものでありましたが、あくまでも左官仕事を立派に完了させることが前提にあったと考えられます。当時の左官仕事は、材料の調達や乾燥期間を含めると半年や１年程度の期間がかかる長期間の仕事であったことから、一人が制作できる鏝絵作品の数も少なかったようです。修練を積み、腕を上げる機会には限りがありました。

次回はそうした左官たちの系譜を辿っていきたいと思います。